

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成26年6月5日現在

|  |
|--|
| 機関番号：34310   |
| 研究種目：基盤研究(C)   |
| 研究期間：2011～2013   |
| 課題番号：23520342  |
| 研究課題名（和文） 離国者文学における主体の変容—文化の混淆と文学  |
| 研究課題名（英文） Transformation of Subjectivity in Expatriate Literature—Cultural Fusion and Literature |
| 研究代表者<br>有満 保江 (ARIMITSU, Yasue)<br>同志社大学・グローバル地域文化学部・教授<br>研究者番号：20097075                       |
| 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）3,100,000円、（間接経費）930,000円  |

研究成果の概要（和文）：助成を受けた3年間、当研究課題についての報告の場および出版の機会を国内外（オーストラリア、日本、オーストリア、カナダ、スペインなど）に得ることができ、大いに研究成果を上げることができた。ことにこれらの国で開催された国際学会に出席した際には、世界各地から出席した研究者との意見交換で、さらなる問題意識を高めることができた。また、複数の国において論文の刊行を実現できたことは、当研究課題がある地域に限られたものではなく、グローバルに展開しつつあるものであることが確認できた。近い将来には、この成果を本にまとめる計画である。国内で豪州文学を日本に紹介する翻訳プロジェクトを立ち上げたことも実りの一つである。

研究成果の概要（英文）：

While I was receiving subsidies over the last 3 years, I had many opportunities to present my papers at international conferences within and without Japan such as Australia, Austria, Canada and Spain. Attending these conferences, I had many opportunities to exchange intellectual ideas with researchers from various countries. These experiences stimulated my incentive to further study on this theme. I had my several articles published in journals, books, and online journals. These accomplishments actually proved that the subject I have been dealing with is not just limited to some particular areas but also is world-wide, universal and contemporary issues. Therefore, the theme has to be further developed in the future. I am planning to write a book based on my studies over the last 3 years. There is another outcome from the subsidies. I started a ten-year project with a publisher and with some academics from Australia: "A Translation Project of Australian Literature" and this will surely promote our understanding between Australia and Japan. The third translation book will be published in July this year.

研究分野：英米・英語圏文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：多文化社会と文学、離国者文学、文化の混淆、主体の変容、他者の消滅

### 1. 研究開始当初の背景

2011年に、当研究プロジェクトを開始するきっかけとなったのは、多文化社会オーストラリアの文学にみられる「主体」の変容に関心をもったからである。1970年代半ばより、世界中から移民を受け入れる多文化主義政策を導入しているオーストラリアでは、オーストラリア人の定義が、従来のオーストラリ

ア人（白豪主義によるアングロ・ケルティック系白人）の定義から明らかに変化している。そこには、ヨーロッパからの移民はもちろん、アジアやアフリカ、南米からの移民が新たなオーストラリア人を構成するようになっている。そうした背景のなかで、文学における主体がどのように変化しているのかに興味をもち、さまざまな地域出身の文学の分析を

試みたいと考えた。文学、ことに近代小説の発展過程においては、ひとつの国家、エスニシティ、文化、言語という枠組みがその根本にあり、それらを基盤に小説が発展していったものだと考えられるが、しかし、多文化社会オーストラリアではこの構図が大きく崩れ去っていることに注目した。

このプロジェクトの最初の関心は、オーストラリア文学とは何をもってして定義できるのか、という問題である。たとえば、①香港出身でありポルトガル、イギリス、中国など複数のエスニシティの背景をもち、オーストラリアで教育を受け、その後オーストラリアで作品を書き続ける作家、②南アフリカ出身で、南アフリカ作家としてノーベル賞を受賞した作家がオーストラリアに移住し、その後、作品を書き続けている作家、③幼い頃にベトナムから難民としてオーストラリアに移住し、オーストラリア人として成長し、アメリカで作品を書く作家、などが登場し、何をもってしてオーストラリア作家というか、ということの定義づけが困難になってきていることは明らかになる。こうした国籍、エスニシティ、文化が複雑に交錯する状況のなかで、文学はどのように変化、変容していくのかについて、大きな関心をもつようになった。ことに、本国を去り、まったく別の文化圏、たとえば東洋の文化圏から、西洋文化圏を交錯する環境に置かれた作家たちが、何を基盤に作品を書いていくのか、という問題に興味をもつようになった。そしてその問題が、今回の「離国者文学における主体の変容—文化の混淆と文学」というテーマに結びつき、科学研究費を申請する根拠となった。

これまでの研究課程においては、オーストラリア文学という、同じ英語文化圏でありながら、英米とは異なる独自の文学、すなわち、イギリス系白人を基盤にして太平洋に位置する白人国家として、独自の文化を形成してきたオーストラリアにおいて、多様なエスニシティ、文化さらには言語を抱え、そこから生まれる文学については、国内でさまざまな現象を体験してきている。たとえば、従来のヨーロッパ系白人社会を基準にした状況のなかでは、社会的構造が固定的であるという大前提のなかで、文学は政治や社会とは直接かかわりのないものとされて評価されていたが、移民を受け入れるようになった 1970 年代からは、社会的構造が複雑になるにつれ、文学作品の評価は、移民作家への評価が高くなった現実があった。

その結果、従来のイギリス系文学よりも、エスニック的な背景が複雑な作家が高く評価される風潮が増し、文学的価値においても、そうした文学へ重きが置かれるようになった。そうした状況下で、アイデンティティ偽称問題など、自らの出自を偽る作家が出現し、

社会的な問題を引き起こすことになった。つまり、多文化社会となったオーストラリア社会において、文学的価値は従来の基準とは異なる尺度で評価されるようになってきたということである。

さらにオーストラリアには、先住民の問題もある。従来、文字を持たない文化をもつ先住民作家たちが、オーストラリア社会のなかで自立するにしたがって、英語を習得し、英語によって作品を書く作家が登場することになる。彼らが書く作品も、移民作家によって書かれた作品に加えて、オーストラリア社会の中で脚光を浴びることになる。そして、移民作家と同様に、偽称問題が引き起こされ、現実には、先住民とは何か、オーストラリア文学とは何かに加えて、先住民文学とは何か、とう新たな問題提起が行われることとなる。

このように、オーストラリア社会におけるオーストラリア文学には、さまざまな問題提起が行われている。これらの問題については、すでに著書のなかで検証済みであるが、今回の科学研究費申請にあたって、本来のヨーロッパに始まった文学の発展過程を鑑み、グローバル化が進行し、文学の定義そのものの基盤が崩壊していると思われる現在の状況のなかで、文学における主体がどのように変化、変容しているかということに疑問がわき、今回の科学研究費の申請に結びついたといえよう。

## 2. 研究の目的

科学研究費の申請にあたり、その目的とするところは、移民作家や先住民作家など、白人中心から多文化的な背景をもつ作家による作品に表象される主体（アイデンティティ）が、国家とどのような関連しているのか、そしてグローバル化が進行する現代社会のなかで、その主体がどのように変化しているかを解明することである。その際に次の3点に焦点を当てることにした。

(1) 多文化化、あるいはグローバリゼーションが進行する現代社会において国家とは何か、その定義について考察する。近代国家は、一民族、一文化、一言語という枠組みによって統一が図られてきた。オーストラリアはイギリスの植民地として始まり、のちに自治国家として独立、白人のみの国家形成を行った。植民地から国家形成時期に発達した文学は、アイデンティティの確立に力がそそがれた時代である。しかし、第一次、第二次世界大戦を体験した後、国家の情勢は大きく変化する。それまでのオーストラリアは太平洋に位置しながらもヨーロッパ人で構成されヨーロッパの伝統を受け継ぐ国であった。しかし 1970 年代にはいってイギリスからの移民人口の激減、さらに出生率の低下で国家存亡の危機を迎える。そこで人口増加を目指

して、洋の東西、文化や言語の違いを問わず、世界中から移民を受け入れることになる。つまり、オーストラリア国内に多文化現象が起ることになる。その結果、オーストラリアに生まれる文学は、それまでの白人中心の文学ではなく、多様な文化、民族、さらには言語を反映するものとなった。こうした現象は、従来の文学の定義である、一国家、一民族、一文化、一言語というという枠組みから大きく逸脱するものとなる。多文化社会における国家の定義がこのように変化することによって、文学の在り方、ことにナショナル・リタラチャーの定義も根本的に変化を遂げていることを検証することが当研究の第一番目の目的である。

(2) 第二番目の目的としては、現代に生きる人間にとっての主体の在り方を検証することである。近代国家に帰属することによってその人間の主体が確立すると考えられ、文学もその主体の表象とされていたが、20世紀後半ごろから、先に述べたように国家の定義に変化が起り、文学と国家との関係も従来とは異なる状況が生まれた。つまりアイデンティティの基盤となる文化、エスニシティ、言語の統一が失われ、文学における主体がこれまでの概念とは異なるものへと変化してきている。

かつての拙著『オーストラリアのアイデンティティ』(1993年)においては、移民社会で執筆活動をする作家の主体(アイデンティティ)の崩壊に注目したものの、その実態を把握するところに止まっていた。しかし、今回の研究プロジェクトでは、文化やエスニシティの混淆によって、より具体的な「主体」の変容、「アイデンティティ」の概念の変容に切り込むことを目的とした。そのために、ひとつの仮説を立て、その証明を行っていくことが、この問題の解明に近づけるのではないかと考えた。その仮説とは、多文化社会のなかで生まれる文学作品からは、作家の主体あるいはエスニシティを特定することが困難になっているということ、さらには、作家は自らの主体を追究しない方向に向いているのではないかと、ということである。いくつかの作品を対象にその実態をさぐることを二番目の目的とした。

(3) おそらく、この研究プロジェクトのテーマは、ヨーロッパ圏の研究者が取り上げることにはほとんどないものと考えられよう。その理由は、文学はヨーロッパに生まれ、ヨーロッパにおいて発展してきており、その概念はきわめてヨーロッパ的なものである。したがって、東洋の英語圏文学の研究者によるアイデンティティや主体の変容という概念そのものが、おそらく受け入れがたいものであると考えられる。しかしこの研究を、国内外の国際学会において発表することには大き

な意義があるものとする。多文化を反映する文学における主体が変容あるいは消滅しているという現象は、現代のグローバル化社会においては、ひとつの特定の国、あるいは地域の問題ではなく、広く世界的に起こっている現象として、問題提起を行っていくことが、第三番目の目的である。

### 3. 研究の方法

(1) オーストラリアにおける、さまざまな国や地域出身の作家の文学をとりあげ、離国者作家のもつ作品のテーマ、表現方法、そして登場人物の主体の在り方に焦点を当て、作品分析を行った。ディアスポラという表現がよく使われるが、これはあるひとつの国家に居住しながら、別の場所と繋がっている者をいう。たとえば今居住している国以外の場所で生まれ、移住してきた者、両親が移民であり本人は今居住する国で生まれ育っている者、何世代か前にどこか別の場所から今住む国に移住してきた者など、その形はさまざまであるが、ディアスポラにとって、自分とは何かという課題は、文学、とくに小説にとって基盤となるものであり、それはとくに自ら属する国とのつながりに関係するものである。

しかし、ディアスポラにとっては、従来のアイデンティティはもはや重要なものではなくなくなってきている。ここでは、ディアスポラにとってのホーム(故郷)とは何か、ディアスポラにとって小説を書くとは何か、について、実際に作品に描かれた登場人物の「自己」の表象に焦点をあてて分析を試みた。そして作家の出自と登場人物の出自は、作品のなかには顕著に表れることがなくなっていることを検証した。すなわち、ディアスポラにとって、アイデンティティや主体に囚われることが、作家の創作の障害になっているとさえ思われる。よって、ディアスポラ作家の創作過程において、登場人物の主体、アイデンティティを「消滅」させようとしていると考え、その手法に焦点を当ててみた。

(2) ディアスポラ作家といえ、その作品にはポストコロニアリズムの要素が少なからず反映されていると考えられる。しかしながら今回のプロジェクトにおいては、ポストコロニアリズムの理論は重要な位置を占めるものではあるが、その理論は、逆説的な意味で重要であることを検証するものである。すなわち、多文化社会、グローバル化社会では、ポストコロニアリズムの理論では説明できない現象が起きていることに注目し、その現象について解明を試みた。

ポストコロニアリズムの理論では、植民者・被植民者、支配者・被支配者、中心・周縁、といった二項対立的な社会構造はより複雑化し、さまざまな要素が交錯している。つ

まり「自己」と「他者」という関係性が崩壊し、「他者」を明確に特定することができない状況が生まれている。多文化社会は、70年代から盛んに論じられてきたポストコロニアリズム理論に当てはまらない状況を生み出しているともいえよう。ディアスポラ作家が生み出す作品は、ポストコロニアリズムの理論を用いて、この理論には当てはまらない、つまり「他者」の存在を否定することによって、「主体」を消滅させているという現実を検証した。多文化社会において、ポストコロニアリズムの理論は必ずしも当てはまらない、言い方を変えるならば、ポストコロニアリズムには限界があることを、この理論を用いて検証した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 論文の報告について

3年におよぶ研究期間において、国内外の学会で全5回の論文発表の機会を得た。東京大学アメリカ・太平洋研究所主催による太平洋をめぐってのシンポジウム、カナダ、モンリオールのコンコルディア大学における英文学関係の学会、スペインのバルセロナ大学で開催されたオーストラリア文学研究関係の学会、そしてオーストリアのインスブルック大学で開催された英文学関係の学会においてそれぞれ研究発表を行った。学会では、世界各地から英語圏文学の研究者、オーストラリア研究者をはじめ、学際的な研究者が集うものだったが、発表論文は高く評価されたと考える。発表した論文はすべて、ジャーナル、書籍、オンライン・ジャーナルに掲載され、世界中の研究者の目に触れることになった。(学会で発表したタイトルは次の項目を参照のこと)

##### (2) 発表の論文の内容

①ベトナム出身のオーストラリア人作家の短編集がアメリカで出版され、世界的に注目された。この作品が注目された理由、および作品の特徴について分析、作品の評価が作家のエスニシティに影響されているのではないかという仮説を立て、作品と作家のエスニシティの関係について分析した。作品に登場する多様なエスニシティをもつ人物の主体がどのように描かれているかについて詳細に分析し、現代の離国者作家の「主体」そのものが、消滅しつつあるのではないか、というひとつの結論に到達した。それと同時に、多文化社会において発表される作品を読む読者は、作品を書いた作家のエスニシティを特定することはほとんど不可能である、という結論に到達した。この件については、さらなる検証が必要である。

②20世紀後半から、人的移動によって国を代表する文学に変化が訪れることを次のディアスポラ作家、Brian Castro (香港出身

のオーストラリア作家)、Name Le (ベトナム出身のオーストラリア作家)、V.S. Naipaul (トリニダード出身のイギリス作家)、Salman Rushdie (インド出身のイギリス作家)などと比較し、彼らにとってのホームとは何か、ホームが彼らの作家に果たす役割について論じ、彼らにとってのホームとは現実のものではなく、想像の世界の中にあるもので、それは固定的なものではなく記憶のなかで常に揺れ動き、漂うものであることを検証する。ディアスポラのホームは自らの記憶や深層心理に存在するものであり、そのホームこそが、ディアスポラ作家の創作の根源となっていることを検証した。言い換えれば、ホームをすでに失ったディアスポラ作家にとってのアイデンティティは書くことそのものであり、物理的に帰属するホームではなくなっている。したがって、ディアスポラ作家の作品では、歴史、伝統、そして家族の系譜といったものから逸脱することが表象されることにある。このようにして生み出される文学作品は、従来の文学作品の概念と大きく異なっている。しかしその結果、従来とは異なる何か新しいものの創造に結びついていないか、という結論を導いた。今後、さらなる検討が必要である。

③多文化社会オーストラリアと日本について、とくに「他者」という概念について、検証を行った。グローバル化が進行し、主体の定義もあいまいなものであり、また、作品もアイデンティティの追究をあえて行わない方向に進んでいるが、この現象は言い換えるならば、「他者」の存在が特定できないことになるのではないかと考えられる。「他者」という用語は、Edward Said が *Orientalism* を著して以後、ポストコロニアル作家が *Orientalism* をしばしば利用することによって使用された。すなわち、世界を「自己」・「主体」と「他者」とを分離したとき、自己とは異なる文化、エスニシティ、言語を持つ人々を「他者」としたわけである。したがって、自己の存在は「他者」あってこそ成り立つ、という構図が存在する。このような背景のなかで、多文化現象、あるいはグローバル化が進行するなかで、文化やエスニシティ、言語の混濁が起こり、主体と他者のとの境界線が見えなくなったとき、この「他者」を特定することが困難となり、ゆえに「主体」という存在も特定することも困難になる。

このケース・スタディとして、日本とオーストラリアにおける1970年代を舞台にした2つの作品の内容の比較検討を試みた。同じ素材を扱いながら、その表象においてオーストラリア作家と日本作家のあいだには大きな開きがあった。オーストラリア作家は、日本人を作品に表現するとき「他者」の目で描いているが、日本人はオーストラリアに対し

て「他者」という視点をもたない。つまり、「他者」という表現は、西洋人の「主体」の産物であることが、オーストラリアと日本の作品の比較のなかに発見することができた。この発見は、書籍のなかの論文として掲載されることになっている。

オーストラリア作家が日本について書いた作品の数を比較するとオーストラリア側が日本の4倍となっている。この隔たりが、日本とオーストラリアのそれぞれの国、文化を見る目を異なるものにしていないかと考えられる。

④日本では多文化を反映した作家はオーストラリアほど顕著ではないが、グローバル化が進行する昨今、日本人作家が海外の影響を受けて作品を書き、さらには日本のみならず海外で多くの読者を得ている現実がある。たとえば村上春樹がひとつの例であるが、こうした作家が従来の日本の作家と異なるのは、日本文学の系譜から逸脱したところで作品を書いていることに関係しているのではないかという仮説を立て、グローバル化される現代においては、ひとつの国を代表する作家という枠組みは消滅し、作家が属する国のみならず世界で広く読まれる作家が注目されるようになってきている。その場合、まだ存在する枠組みは、「言語」であるという仮説が成り立つ。そしてその場合に「翻訳」が果たす役割は大きい。こうした状況下での今後の文学にみられるアイデンティティの行方に注目していきたい。

現代文学作品において、自己がどのように表象されるかについて追究することが、自己・主体の確立に大きくかかわるものと考え、日本とオーストラリアの作品を比較し、そこから見える自己の確立の相違に焦点を当ててみた。そこに見えてきたものは、それぞれの「他者」の捉え方が異なるということである。すなわち、「他者」をどのように捉えるかによって、「自己」あるいは「主体」のありかたに相違がみられるということである。この相違は、ポストコロニアル理論をもつヨーロッパと、それに影響されていない日本の作家の特質に大きく関係しているのではないかという結論を導き、自己を他者と区別するアイデンティティと、「他者」によらずに自己の存在を定義づけようとする文化本質主義的な自己と捉え方を比較検討することができた。今後は、「主体」「他者」「アイデンティティ」の研究へと発展させ、一冊の本にまとめたいと考えている。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① Yasue Arimitsu “The Contemporary State of Academic Appraisal of Australian Literature in Japanese Universities,” *Antipodes*, (The Publication of the American Association of Australian Literary Studies) June 2011, 7-13.
- ② Yasue Arimitsu “Nation, Subjectivity and Identity in the Globalizing Literature,” *Coolabah*, No.13, 2014, 1-12. (ISSN 1988-5946, Observatori Centre d’Estudis Australians, Australian Studies Centre, Universitat de Barcelona)
- ③ Yasue Arimitsu 「文学にみる他者性—日本とオーストラリアの場合」『東京大学アメリカ太平洋研究』第14号, 2014年3月, pp. 63-80.

[学会発表] (計6件)

- ① Yasue Arimitsu ‘Nam Le’s *The Boat: A Reflection on Multiple Selves*,’ “2011 CISLE Conference” at Concordia University, Montreal, Canada, 13 July, 2011.
- ② Yasue Arimitsu “Australia as a Literary Device in Japanese Literature,” 東京大学アメリカ太平洋地域研究センター主催 “Imagining the Pacific, Imagining Australia,” 東京大学駒場キャンパス, 27 July, 2012.
- ③ Yasue Arimitsu, Plenary Speech: “Nation, Subjectivity and Identity in the Globalizing Literature,” at the conference of “Looking Back to Look Forwards,” Barcelona University, Barcelona, Spain, 11 December, 2012.
- ④ Yasue Arimitsu, Plenary Speech: “Is Australia the Another for Japanese Writers? Differences of Literary Perceptions of the Other between Australia and Japan,” at the Third International Academic Forum, Ramada Osaka, Osaka, 25 May, 2013.
- ⑤ Yasue Arimitsu, “Two Parodies of Patrick White’s *Voss*: Randolph Stow’s *Midnite* and Hisashi Inoue’s *Yellow Rats*,” at the International CISLE Conference in 2013: “Literatures in English: New Frontiers in Research,” at

Innsbruck, Austria, 20 July, 2013.

- ⑥ 有満保江 「離国者作家のホームと主体：マンスフィールドとホワイトの場合」シンポジウム「Katherine Mansfield 没後 90 周年金—ニュージーランドを故郷にして」於：日本女子大学, 2013 年 9 月 21 日.

[図書] (計 2 件)

- ① Yasue Arimitsu “Nam Le’s *The Boat: A Reflection of Multiple Selves*,” *Literatures in English: New Ethical, Cultural, and Transnational Perspectives*, Michael Kenneally, Rhona Richman Kenneally, and Wolfgang Zach (eds.), *Literatures in English: New Ethical, Cultural and Transnational Perspectives*, (Tubingen: Stauffenburg Verlag, 2013), 399-416.
- ② Yasue Arimitsu, “Otherness and Postcolonialism: A Comparative Study of Japanese and Australian Literature,” *Literatures in English: New Frontiers in Research* (SECL 24) ed. by Michael Kenneally, Rhona Richman Kenneally, Wolfgang Zach (Tuebingen: Stauffenburg Publ. to be published in December 2014).

名

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有満 保江 (ARIMITSU, Yasue)  
同志社大学・グローバル地域文化学部・教授  
研究者番号：20097075

(2) 研究分担者

( 無 )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( 無 )

研究者番号：